

ブラジル人親子支援プログラムの有効性に関する一考察

杉山 喜美恵・長谷部 和子・高山 育子ⁱ

I. はじめに

当校が位置する岐阜県は全国的にブラジル人が多く在住している。筆者らは2006年よりブラジル人親子をとりまく状況を把握し、彼らに適切な支援を行うため、調査研究を行っている(図1)ⁱⁱ。

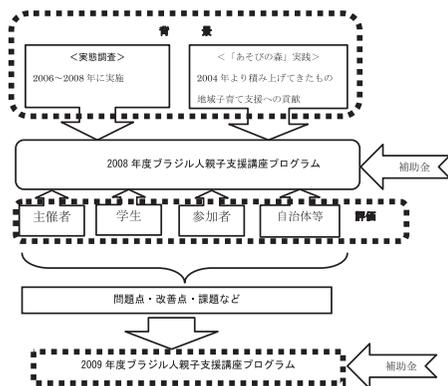


図1. 調査研究の枠組み

本稿では、図1に示されている2008年度ブラジル人親子支援プログラムⁱⁱⁱ(以下、プログラムと記す)の実践を振り返り、このプログラムの有効性について考察することを目的とする。

有効性について考察する場合、有効性をどの視点から検証するかということが問題となる。

ひとつには、このプログラムに対する参加者の満足度があげられる。これはプログラムの有効性を検証するためには欠かせないものである。

もう一つには、養成校という立場であるため、学生の育ちという視点を重要視している。最終的にこのプログラムの有効性を検証するためには、図1に示された主催者、学生、参加者、自治体等の四者に対し、たとえば聞き取りやアンケート等の調査をおこない、その結果から総合的に判断することが必要であるが、それらに関しては今後、実施していく予定である。

今回は、我々が重きをおいている学生の学び

に焦点をしばってプログラムの有効性を考察してみたい。

II. プログラム概要

1. 実施までの経緯

2006年から2008年にかけて実施したアンケート調査^{iv}の結果より、ブラジル人保護者、子どもの保育に携わる保育者ともにさまざまな問題をかかえている状況が見えてきた。保育現場は非常に多忙であり、必要であるとは感じながらも十分な支援ができないのが現状である。

また、前述したように当校が位置する岐阜県は全国的にもブラジル人が多く生活しており、当校の学生も卒業後保育者として仕事についている場合、彼らの支援にあたることも多いと推測される。彼らのおかれた状況を正しく理解し、彼らの支援に当たるためには、在学中に彼らとの相互理解を深める機会を持つことが有効であろうと考えた。

上記のことより、学生参加のブラジル人親子支援のためのプログラムを実施することにした。参加者の募集は主に、それぞれの自治体の多文化共生事業に関わっている職員にお願いして、ポスターを掲示し、個別に声を掛けていただいた。また、自家用車を持たない人たちが参加できるよう送迎バスを準備した。日程は負担にならない、仕事になるべく差しさわりのないよう、月に1回、日曜日に設定した。

ポスターは各回の関連性(同じ場所で同じようなことをする)をわかりやすくするため、3回とも同様の形にした。

当校では2004年以降、未就学児を持つ親子対象に子育て支援プログラム「あそびの森」^vを展開している。そこで培ったノウハウを駆使して有意義なプログラムにしようと試みたが、日本語を母国語としない人たちに対する子育て支援プログラムは、すべての文書をポルトガル

語と日本語併記にする、日本語は漢字を使用せず、平易な言い回しを使う、交通手段の確保など日本語を母国語とする人対象のプログラムとは異なった配慮を必要とする場面にたびたび遭遇し、主催者として学ぶことが多かった。

2. 対象

各務原市、可児市、美濃加茂市に在住、あるいは在勤の日本語を母国語としないブラジル人未就学児およびその保護者

3. 日程および内容

- 第1回 2008年12月7日(日) クリスマス会
 - 第2回 2009年1月18日(日) 日本のお正月
 - 第3回 2009年2月8日(日) 節分
- ※時間は各回ともに13:30～16:00

4. 参加人数

| 回 | 子ども | 保護者 | 学生 | 教員 |
|---|-----|-----|----|----|
| 1 | 16 | 13 | 27 | 8 |
| 2 | 12 | 11 | 24 | 8 |
| 3 | 21 | 22 | 15 | 9 |
| 計 | 49 | 46 | 66 | 26 |

このほかに、ポルトガル語通訳者、自治体関係者、見学者などが参加した。

5. 各回の詳細

(1) 第1回 「ちょっと早いクリスマス」
内容は以下のとおりである。

- ① 初めの挨拶 (日本語・ポルトガル語)
 - ② てあそび
「あおむし」日本語・ポルトガル語
 - ③ 「数の数え方」の説明
 - ④ トランプ遊び
 - ⑤ 懇話会 (保護者) と自由あそび (子ども)
- ☆おやつタイム



写真1. 到着時の様子

ブラジル人幼児就学前支援と銘打って対象者を募集したが、参加者の顔ぶれを見ると、就学前の子どもたちはわずか2名ほどであった。内訳は生後3か月の乳児1名・2歳児1名と小学校3年生(2名)・4年生(3名)、小学校5・6年生(5名)と中学生(2名)であった。ブラジル人の方々は大抵家族一緒に行動することが多いので、対象園児1名に兄弟がいれば、全員参加する。子どもたちの年齢については第1回目から想定外の状況での開催となった。

外国籍の子どもたちは日本で生まれたり、幼児期に両親とともに来日したりと条件は様々であるが、小学校に入学後、学年を重ねるにつれ、日本の勉強についていけない子どもたちが増加すると言われている。これは日常生活の中で当たり前に使われている会話なども大きく影響している。

そこで、我々は日本独特の言い回しや、伝統などに焦点を当て、少ない回数の中で少しでも多くの知識を与えることができればと考え、「数」の数え方を説明することにした。

学生たちは、グループに分かれ、1～10までの数に合わせた「絵」を描き(写真2)、それらの数え方を皆で声を出して練習した。

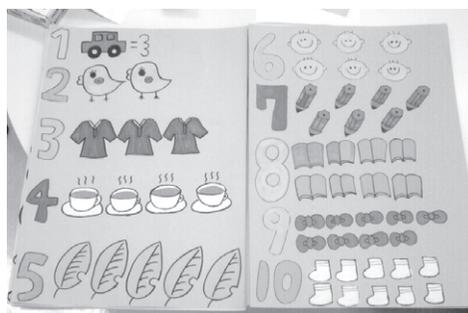


写真2. 数の数え方(学生が作成したもの)

車(…台)、ジュース(…杯)、家(…軒)、魚(…匹)、象(…頭)、キャンディ(…個)、友達(…人)カエル(…匹)、鳥(…羽)など全員の前で学生たちが説明した後(写真3)、それぞれの家族に1～2人の学生がつき、その他の物の数え方を練習してもらった。これは子どもたち対象で練習することを想定していたが、両親が非常に熱心に質問していた。



写真3. 数の数え方(説明の様子)

質問が出尽くしたところで、子どもたちは学生たちとトランプゲームの数字を使うゲームを行った。出来るだけ数字を声に出して言うことで日本の数字の数え方に慣れてもらうことを目的とした。

(2)第2回「日本のお正月について知ろう！」

お正月が終わった時期であるので、その様子を身近に感じることができると考え、日本のお正月をテーマとした。

お正月と一言でいってもあそび、料理、道具、風習などとりあげられる事物は多々あるが、わかりやすさを重視し、「お正月」という歌をとりあげることとした。

内容は以下のとおりである。

- ① 日本のお正月について知ろう！
 - ・「お正月」の歌
 - ・お正月の食べ物、遊び、お年玉
 - ・千支(十二支の由来)
 - ② 歌って踊ろう「なんじゃ・もんじゃ・にんじゃ」
 - ③ 懇話会(保護者)と自由あそび(子ども)
 - ・カルタ、百人一首、すごろくで遊ぼう
 - ・ぶんぶんゴマを作ろう
- ☆ おやつタイム

最初に、「お正月」の歌を紹介し、その中ででてるこままわし、羽根つきを実際にデモンストレーションした。特にカルタは、ポルトガル語の carta から来たという話をすると、日本とブラジルの意外なつながりを見つけ参加者や学生の反響が大きかった。小さなことであるが、異国間でのコミュニケーションを活性化させるにはこの「つながり」が大切だと感じた。

また、ブラジルのお正月について尋ね、ブラジル、日本それぞれの文化について理解する機会を意図的に設けた。一方的に「教える」のではなく、相互理解の場になるよう心がけた。

次に、『十二支のおはなし』^{vi}という絵本の読み聞かせを行い、十二支にでてくる動物を紹介した。十二支をわかりやすく伝えるために、それぞれの動物については、日本語とポルトガル語を併記した資料を配布した。

日本人にとって干支は生活に深く根付いている。「干支」を媒介にして話はずむきっかけになることも多い。ブラジルには十二支のような存在はなく、干支で年齢を推測したり、「今年は〇年だから」という生活の中でさりげなくでてくる干支の存在は、ブラジル人にとって興味深いものではないかと考え、「十二支」を選択した。

読み聞かせは、通訳を介して行なったため、通常より時間が長くかかったが、参加者はとても集中して聞いてくれた。

事前に絵本の話の内容を通訳者にメールで送付しポルトガル語に訳していただいた。当初、話の要約をしてもらうつもりだったが、その後打ち合わせができず、学生がまず日本語で読み、そのあとポルトガル語で通訳者が読むという形となった(写真4)。



写真4. 通訳を介した読み聞かせの様子

もともと短い話ではないのでかなり時間がかってしまったが、学生にとって通訳を介した読み聞かせは初めてであり、結果的によい経験になったと思われる。

由来について知った後、ひとつひとつの動物と読み方をカードで説明し(写真5、6)、ポ

ルトガル語、日本語で音読した。そして参加者は自分の干支を調べた。



写真5. 十二支の説明



写真6. 十二支の説明(カード)

次に、気分転換を兼ねて「なんじゃ・もんじゃ・にんじゃ」を踊った。音楽は万国共通なので体を動かすことは雰囲気を和らげることに効果的であると感じた。

その後、親は懇話会へ参加するため、懇話会会場へ移動した。

子どもたちには、「カルタ、百人一首、すごろくなどを準備したのでこれらを使ってあそんだり、ぶんぶんゴマを作ったりすることができるよ」と伝えたが、通訳者が親と共に懇話会会場へ移動してしまったため、伝えるのに苦労した。しかし、学生が見本を示すと、すぐにルールを理解し、年齢が高い子どもが多く参加していたこともあって、カルタや坊主めくりに興じる姿も見られた。ちょっとしたことに言葉の壁を感じた。

年齢の低い子どもたちは、滑り台やロフトに上ったりと体を動かして遊ぶことが好きなようで、学生とともに所狭しと走りまわり、保育実習室は笑顔と歓声に包まれていた。

生き生きとした子どもたちの姿を見ていて、普段、このようにブラジル人だけであそぶ機会が少ないのだろうかと感じた。

恒例の「おやつタイム」では親と合流し、学生とともに飲食を楽しんだ。思いっきりあそんだせい、子どもたちと学生はとても打ち解けた雰囲気であった。

(3) 第3回 「節分であそぼう！」

企画段階では、最終回となる第3回では、小学校入学を控えた子どもと保護者に、小学校の様子を伝える内容にしようと考えていた。しかし、先述したように、実際に参加してくれる子どもたちの年齢層が幅広かったため、第1回、第2回と同様に、日本の伝統文化を伝える内容とし、2月上旬という時期であったため、節分をテーマとして選んだ。

内容は以下のとおりである。

- ① みんなで踊ろう「おにのパンツ」
- ② 紙芝居『まめっこぼりぼりおにはそと!』^{vii}
- ③ 鬼がきたよ!! 豆まき体験
- ④ 絵本『おにたのぼうし』^{viii}
- ⑤ 歌って踊ろう「なんじゃ・もんじゃ・にんじゃ」
- ⑥ 懇話会(保護者)と自由あそび(子ども)

・おにの面をつくろう

・折り紙(マス、手裏剣)プレゼント

☆おやつタイム

全員が集まった最初の挨拶で、参加者にひいらぎと杓を見せ、「これは日本の節分で使うものですが、知っていますか? 今日、一緒に遊んだら、これが何かわかるでしょう」と伝えた。ブラジルとは異なる日本の文化を紹介するということを印象付けようというねらいである。

「おにのパンツ」は日本では馴染みのものであり、原曲「フニクリ・フニクラ(Funiculi funiculà)はイタリアの古い歌曲なので、知っている参加者も多いかと思い選曲した。大人も一緒になって踊り、気持ちもからだもほぐれたところで、節分にまつわる紙芝居を見せた。

今回、紙芝居や絵本を選定して感じていたことであるが、節分を「文化」としてわかりやすく子どもたちに伝える内容の教材が思ったより

も少なかった。紙芝居『せつぶんだ、まめまきだ』では、「ふくはうち、おにはそと」と言いながら豆をまくという風習の紹介を中心として、内容を少し割愛した。また、日本語を理解する子どもたちが多かったため、紙芝居は通訳を行わず、日本語のみで行なった。子どもたちは読み手の近くに集まって、熱心に聞いてくれた。また、紙芝居という手法は、日本語が理解できない保護者にも伝わったのではないかと思う。

紙芝居が終わり、子どもたち全員に折り紙で作った柀に豆を入れて渡し、「ふくはうち、おにはそと」の掛け声を練習した。そこに鬼のコスチュームをつけた学生を登場させて、豆まきを体験してもらった（写真7）。



写真7. 鬼がきたよ！ 豆まき体験

少し落ち着いたところで、今度は通訳つきで、『おにたのぼうし』の読み聞かせを行なった。『おにたのぼうし』には、「おににも、いろいろあるのにな。にんげんも、いろいろ いるみたい。」というせりふがある。少し難しい内容であり、また、通訳つきで読むには長いと思ったが、多文化共生を意識して、あえてこの本を選んだ。内容は一部省略したが、まめまきのシーンと、このせりふはそのままにして、「おにた」の心象が伝わることをねらった。

前半の最後として、第2回目と同じ「なんじゃ・もんじゃ・にんじゃ」を参加者全員で踊った。前回、「手裏剣って何？」という質問があったので、今回は、折り紙で手裏剣を作り、参加者に配布した。前回と同じ歌やてあそびを行なうことで、プログラムに参加していることに対する感謝の気持ちを伝え、プログラム参加者と

の交流を深めることができるのではないかと感じた。

この後、保護者は懇話会会場に移動し、子どもたちは学生と一緒に鬼の面を製作した。色画用紙を切って顔と角を作り、目、鼻、口をペンで描き、髪の毛は紐を貼り付けた。目の部分に穴をあけ、輪ゴムで耳にかけ、出来栄を披露しあっていた（写真8）。

おやつときには、「歳の数だけ食べれば、この1年、健康に過ごせるんだよ」という話をしながら豆も味わってもらった。

お別れの時には、「もうないのですか？ また来たいです」という嬉しい言葉をいただくこともできた。



写真8. 上手にできたのかな？ 鬼の面製作

（4）懇話会について

ブラジル人保護者のニーズを的確に把握するため懇話会を設けた。

「懇話会」は、日本人親子を対象とした「あそびの森」で2005年から行なっているものである。参加者は6～7人のグループに分かれ、グループに1人のファシリテータがつく。

今回は2グループとなった。元幼稚園園長などがそれぞれファシリテータとしてつき、通訳は1人だったので、日本語が全く理解できないグループは通訳を介した。育児や教育の悩みに対するアドバイスを言い、参加者相互の日常の情報交換を促進するなどした。

質問は、「いじめ」や日本の保育システムなど、我々日本人とは全く違った視点からの質問が多かった。例として、「幼い（3・4歳）にも関わらず、子どもたちが全員きちんと椅子に座り、

先生の話の聞かなければならないのはどうしてか?」「仕事で時間があまりなくて子どもたちと遊んでやれないが、どのようにして子どもとの時間を持ったらよいか?」などである。

また、ブラジルの方々も週末、ほとんど家族で行動することが多いと言われるが、懇話会には全員が夫婦で参加され活発に意見を述べられた。



写真9. 懇話会の様子

ファシリテータとして参加した一人に感想を書いてもらった。以下はその抜粋である。

- ・ 自分の子どもの良いところ（自慢に思うところ）を話してもらった。元気がある、学校でもことばの壁もめげずに頑張っている、天才だ、積極的なところがいい、友だちをたくさん作っている等とてもうれしそうに話された。どの親も自分の子どもを自慢に思うとともに、愛していることがうかがえた。
- ・ 子どもを育てるにあたって、悩みはないかと聞いたところ次のことが話題になった。「真ん中の子が学校になじめない・・・(略)・・・。子育てについて親が悩むことは一緒だと感じた。
- ・ 通訳が「自立」や「反抗期」等、少し内面的な(複雑な)ことばになるとわからなかったので、こちらが気をつけて話さなければと思った。

日本人対象の懇話会とは違い、言葉の面での苦勞はあるが、子育てに関する悩みは国をこえて共通しているようだ。

終了後に、保護者らから感想を尋ねたが、このような育児相談に加わるのは全く初めてで、良い企画だと思うという意見が大半で、ブラジルではこのように経験豊かな幼稚園の園長先生などが参加し、アドバイスする形態の懇話会は

開催されないということであった。

(5) 物資支援

11月の経済ショックの直後の12月の支援活動であったので、保護者から育児・教育相談に加えて、仕事の悩みも多く出された。子どもたちが安心して毎日を通すためには、生活の安定も大きな要素であるので、2回目と3回目には就学支援活動と同時に生活支援のためのバザーを行った(写真10)。

学生たちや教職員に日常生活用品を中心に文具・本・参考書なども含め、食品以外の消耗品も用品として寄付していただくようお願いした。その結果、非常に多くの品物が集った。寒い季節であるため、布団やストーブなど大いに喜んでいただけた。



写真10. バザー会場の様子

Ⅲ. プログラムに参加した学生に対する調査

このプログラムの有効性を検証する一手段としてプログラムに参加した学生に対し、アンケート調査を実施した。

1. 調査対象

第1回のプログラムに参加した学生 27名
(本学幼児教育専攻1、2年生)

有効回答数 24名(回収率88.9%)

学年内訳 1年:14名、2年:10名

2. 調査方法

記述形式の質問紙調査

第1回のプログラム終了後、授業の中で配布し、記入後提出を求めた。

3. 調査内容

質問項目は以下のとおりである。

- (1) 身近な外国人および外国人同級生の有無

- (2) 外国人の子どもに接した経験の有無
- (3) 日本語を母国語とする子どもたちとのかかわり方の違い
- (4) 必要と考える支援
- (5) 岐阜県における外国人を取り巻く環境についての知識
- (6) 今回の参加をきっかけとしてより学びたいと思ったこと

4. 結果

- (1) 身近な外国人および外国人同級生の有無

今までであなたのまわりに外国生まれの人や友達はいたかという質問に対して8割以上の学生が「はい」と回答している(図2)。

この結果より、今の学生にとって外国人が自分のまわりにいることは決して珍しいことではないということがわかる。

国籍の内訳は、ブラジル人が12名で一番多く、次いでフィリピン人が4名、中国人、フランス人、マニラ人、ペルー人、イギリス人、ナイジェリア人が各1名である。

在學生は比較的県内から通学している学生が多いためブラジル人が多いと推測されるが、その国籍は多岐にわたっている。

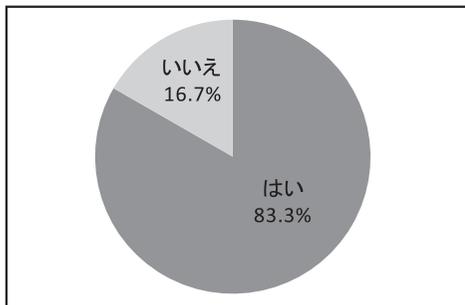


図2. 今までに自分のまわりに外国人や外国人の同級生がいたか

- (2) 外国人の子どもに接した経験の有無

今までに(実習などで)外国生まれの子どもたちと接したことはあるかという問いに対し、「はい」と回答した学生は4名であった。全員2年生であり、どのような時という問いには教育実習または保育実習時に担当クラスにいたと回答している。外国人の子どもとかかわった経験を持つ学生は数としては多くないが、その

機会となっているのは実習であることがわかった。であれば、実習時に初めて学ぶのではなく、事前にある程度の知識を持っていることが望ましいと思われる。したがって、今回のプログラム参加を経験した1年生が、次回の実習で外国人の子どもとかかわることがあった場合、今までの学生とは異なったかかわり方ができるのではと期待している。

- (3) 日本語を母国語とする子どもたちとのかかわり方の違い

今回「あそびの森」に参加して、日本の子どもたちに対するかかわり方とどんなことが違う、あるいは同じだと思ったかという質問に対し、23名が何らかの記述をしていた。

「違い」としては、「友だち同士や親子で話している中に入れにくい^{ix}」、「言葉が通じないのではないかと思ってお互いに緊張が強い」、「身振り、手振りでジェスチャーしたりゆっくり話すことが大切」などに代表されるような使用言語の違いによる記述が多かった。しかし、同時に「子どもが何かできた時にほめることが大切なこと」、「子どもの遊びや喜ぶことは国が違っても同じ」、「触れ合うことは外国の子どもでも日本の子どもの根底にあるものは変わらない」などに代表されるように「子どもへのかかわり方」は本質的に変わらないのだという気づきがあった。

また、「言葉が話せない小さな子どもだったのでかわらない」、「照れやな子も人見知りの子もそうでない子もいる」にあるように「言葉」を取り除くと一人の子どもとしてブラジル人も日本人も変わらないのだということを実感として学べたのは大きな経験であった。

- (4) 必要と考える支援

日本語を母国語としない人たちにどのような支援が必要と考えるかという問いに対し、日本語習得への支援に言及した者が11名いた。しかも「ただ教えるというだけじゃなく、楽しく、興味がもてるような工夫をする」、「例えばゲームを取り入れたりビデオを見てみたり…」、「絵本を読んだり、手あそびをしたり…」、に見られるように楽しく学ぶという記述が多くあり、保育者をめざす学生の特徴を表していると感じた。

また、「とても楽しそうにあそびの森でも遊んでいたし、「また来たい」と言っていた子どももいたので、ボランティアで遊べるこのような機会を増やすと親も子どもも安心感をもって楽しく生活することができるようになると思う」に代表されるように、今回のようなブラジル人と日本人がともにあそぶ機会が大切と答えた者が9名おり、今回のプログラムを意義があるものにとらえていた。

少数意見としては、「義務教育の奨学金」、「外国人のための店をふやす」、「働きやすい環境」があった。

(5) 岐阜県における外国人を取り巻く環境についての知識

岐阜県における外国人を取り巻く環境について何か知っているかという問いに対して「知りません」、「よくわからない」と記述した学生が18名いた(図3)。ブラジル人の数が多くなっているということは感じていても彼らの状況について具体的に知っている学生は半分以下であった。

記述があった内容としては「今、不景気になってきているので、外国人の方はきられる事が多く、又、次の勤め先もほとんどない状態にある」に代表されるように経済状況の悪化による就労の困難さについて言及している者が4名いた。

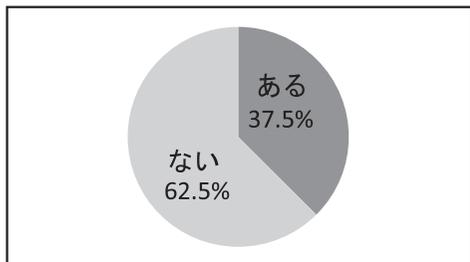


図3. 外国人をとりまく状況についての知識

(6) 今回の参加をきっかけとしてより学びたいと思ったこと

今後、学んでいきたいことについては23名の記述があった。内容としてあげられていたのは、外国人とのかかわり方(コミュニケーション)が10名、文化や風習(あそび含む)が9名、語学が8名である(複数回答)。少数意見とし

ては、日本と外国の共生、日本における外国人家族の現状があげられていた。

IV. 考察

本稿では2008年度に実施したブラジル人親子支援プログラムを振り返るとともに学生の学びという点からプログラムの有効性について考察した。

その結果、このプログラムは学生にさまざまな気づきを喚起したことがわかった。

まず外国人に対する意識の変化があげられる。そのことは、

- ・ 今まで「外人の子ども」と聞くと、ちょっといやだな... 大丈夫かな... と不安でしたが、今回、あそびの森に参加してそんな心配しなくても良いことに気づきました。不安がらずに接すればよいということに気がきました
- ・ 外国人とかかわることによって言葉が通じなくても、楽しいと感じたり面白いと感じることは同じなので...
- ・ 外国人でも日本人でも同じ子どもなので日本人の子どもに接するように外国人の子どもにも自然とふれあって...

などの記述にみられる。「人はみな同じ」とよく言われるがそれを実感として感じる機会は少ない。今回のプログラムはその希少な機会を与えることができたと思われる。また、

今まで、正直「ここは日本だから日本語でいいじゃん!」と思っていたけど、後日バスの中で親の仕事の話を聞いて、「あんなに明るい人達だったのに、本当は大変なんだ」と知り、やはり幼稚園や保育園でそういう悩みを聞いてあげるだけでも必要なんじゃないかと思った。

という記述に見られるようにこのプログラムの体験が以後の学生の生活の中で生きている例もみられた。

さらに23名の学生が今後語学や外国人の子

どもたちとのかかわり方など何らかのことを学びたいと答えており、学習意欲の喚起につながったと考えられる。

岐阜県の外国人登録者数の著しい増加は20代・30代に集中し、その年代は結婚・出産が一番多く、保育園・幼稚園への入園者も多い。本学の卒業生が外国籍幼児を保育する機会は今後とも増えることが予想される。そのため¹に在学中に彼らについて学ぶことは就職後の生活に早くから親しむことができる。実際、今回の調査にあたって学生たちは1・2年ともに今回のプログラム参加を「将来保育者となる」という展望のもとにたって記述している。それは「保育者としてこれからクラスを持ったりいろいろな親の方や子どもたちと関わっていく中で、もう少し多くの言葉や外国語を使ったあそびなどを覚えておきたい」、「他国の子どもがもし自分の担任クラスに（下線筆者）入ったとしたら、その国のルール、宗教等を知る必要があると感じた」という記述からわかるが、他にも「手あそび」「かかわり方」などの保育に関連したキーワードが多く書かれていることからもうかがえる。

1回目に参加していた小学生が2回目もきつと来るからと言っていたのにも関わらず、両親の仕事の都合で引越して、参加できなくなったことを知った学生は、経済の悪化によって仕事を求めて全国を転々と移動を繰り返すという真の意味を悟ったようであった。生活支援活動後、学生たちは社会情勢の変化にも目を向けられるようになってきた。学生たちにとって、これらの経験は卒業後、現場に入ってから、あるいは自分の今生きている時代を深く考える良い機会となった。

V. おわりに

今回のプログラムは学生にとって多くの気づきや学習意欲の喚起をもたらした。

また、懇話会から親が必要としている支援がより就労や生活に直結しているものであることもわかってきた。

これを受けて我々は2009年度にもブラジル

人親子支援プログラムの実施を予定している²。

2009年度実施予定のプログラムでは保護者のため各4回の日本語講座とパソコン講座を準備しており、親が受講している間、子どもたちは学生と一緒にあそび計画である。

2009年度のプログラムは今回のようにできる限り4回を通して参加できる人を対象とする予定である。学生と子どもとの信頼関係が築けるよう担当制の導入や2008年度のプログラムを終えて学生の学習に対するモチベーションがあがっていることを受けて、子どもとの時間をどう過ごすかという計画をたてるなど学生が参加できる機会を多くとりたいと考えている。

i 東海学院大学

ii 本稿は以下の発表に加筆、修正を加えたものである。

高山育子他「ブラジル人親子支援プログラムの実践報告」第48回全国保育士養成協議会研究論文集 pp.166-167 (2009)

杉山喜美恵「学生における外国籍親子支援プログラム参加の意義」第62回 日本保育学会発表論文集 p.370 (2009)

iii 2008年度ブラジル人親子支援プログラム実施にあたっては岐阜県国際交流センターより当校生涯学習センターに対し助成を受けている。

iv アンケートの実施については以下の通り

「外国籍の幼児と保護者とそれに関わる保育者へのアンケート」(2006-2008)

対象：岐阜県4市（大垣市、美濃加茂市、可児市、各務原市）計19ヶ所の幼稚園・保育園の保育者および外国籍保護者

調査項目：保育士：しつけや育児法の違い、日本語理解、支援法（17項目）

回答者：108名

保護者：食事・しつけなど子育てについての習慣や考え方（34項目）

言語：ポルトガル、スペイン、英、日、

回答数：110名

この調査に関連した口頭、ポスター発表は以下の通り

長谷部和子、「美濃加茂市在住外国人幼児の保育についての一考察」『全国保育士養成協議会

第46回研究論文集』, pp.212-213. (2007)

長谷部和子「外国籍幼児の保育についての一考察」『全国保育士養成協議会 第47回研究論文集』, pp.188 - 189 (2008)

長谷部和子「B市在住外国人幼児の保護者について」第62回保育学会発表論文集 p433 (2009)

v 「あそびの森」については以下の報告を参照のこと

若杉雅夫他「子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈1〉」, 『東海女子短期大学紀要第32号』, pp.71-80(2006)

若杉雅夫他「子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈2〉」, 『東海女子短期大学紀要第33号』, pp.105-120(2007)

若杉雅夫他「子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈3〉」, 『東海女子短期大学紀要

第34号』, pp.89-100(2008)

若杉雅夫他「子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈4〉」, 『東海女子短期大学紀要第34号』, pp.105-124(2009)

vi 内田麟太郎／文・山本孝／絵『十二支のおはなし』岩崎書店 (2002)

vii 渡辺節子／作・間瀬なおかた／画

『まめっこぼりぼりおにはそと』教育画劇(2000)

viii あまんきみこ／文・いわさきちひろ／絵

『おにたのぼうし』ポプラ社 (1969)

ix アンケートに記述された内容の引用については、出来る限り原文のままとした。

x 2009年度ブラジル人親子支援プログラムについても継続して岐阜県国際交流センターより当校生涯学習センターに助成を受けている。